



3年前の2月に突然、青森県営農高等学校から講師の依頼が来た。農業気象の講師が退任し、私を後継に指名したというのである。大変困っているようだったので、当時務めていた弘前大学の講師(学校安全特論)を青森県防災士会の白取裕士さん(防災士・一級建築士)に引き継ぎ、私が営農高等学校のお手伝いをすることにした。

講義は必修の「農業気象」で、1年生に90分の授業を8回行い、単位の可否判定までするという、重責を担うものだ。後任が見つかるまでという事で引き受けましたが、今年も見つからないからと、続けることになった。新入生は2014年度32人、15年度33人、16年度26人と推移し、本年度はなんと43人に急増した。

農業にとって気象を味方にするのがとても大切なのは、ご存じの通り。ただ、気象というと一般的には、取っ付きにくく難しい一と思われようだ。「気象学」は「お天気の見識」程度に考え、基本さえ理解すれば、

太陽の周りのかさに飛行機雲がかかる。日がさも飛行機雲も、お天気ことわざでは天気が崩れる前兆とされる(2010年5月16日、青森市上空を魚眼レンズで撮影)



農業、生活にも役立つ

☀️「お天気ことわざ」あれこれ🌧️



- ◆夕焼けは晴れ
- ◆茶碗のごはんつぶが
茶取れないと晴れ
- ◆朝早くスズメが
朝早さえずれば晴れ
- ◆飛行機雲が現れると
くもりや雨
- ◆太陽や月がかさを
かぶると雨
- ◆ツバメが低く飛べば雨
- ◆でんでんむしが木に登ると雨
- ◆ネコが顔をあらうと雨
- ◆アマガエルが鳴くと雨
- ◆弁当忘れてもカサ忘れな
- ◆うろこ雲と厚化粧の女は長続きしない
- ◆小春日和の続く年は大雪
- ◆お山に三度降って里にも
- ◆星がまたたくと風になる
- ◆北風と夫婦げんかは夜おさまる

ほとんど楽しくなるものである。

今年も新入生に四文字熟語の「観天望気」について聞いたら、知っている生徒は2割程度だった。

当然ながらお天気ことわざはほとんど知らないようだった。

観天望気とは、空模様や生物の行動などから狭

い地域の天気を予想する方法で、気象予報士も空を見

上げることが多い。お天気ことわざは、先人

たちの経験や観察・願望などから生まれ、長年にわた

って言い伝えられたものである。当たるものもあれば

当たらないものもある。当然

ものもある。

また、地域限定のものや季節限定のものもある。その多くは、空気の湿りや乾き具合から生まれたものや、長年の観察から生まれたものもあって、アナログ人間の私としてはぜひ推奨したいものがある(表をご覧ください)。

お天気ことわざの数は、全国には数百以上もあると言われているが、その代表選手は「夕焼けは晴れ」だと思っ。これは伝わるうちに短く変化化したもので、本来は「秋の夕焼け、カマをといで待て」だった。季節を秋に限定するとその的中率は90%以上だが、梅雨期は60%程度に下がってしまう。

お天気ことわざは、意味を理解することにより、農業に限らず日常生活にも役立つ。ただ、ことわざに使われているツバメやアマガエルなどの小動物がめつきり少なくなっているのは残念でもある。「言葉は文化」とも言われる。お天気ことわざを、若者や子供たちにもぜひ伝えていきたいものである。

(工藤淳、気象予報士・防災士、アップルウェザー社長、青森市在住)

※次回は6月20日に掲載予定。

今月のお題 観天望気